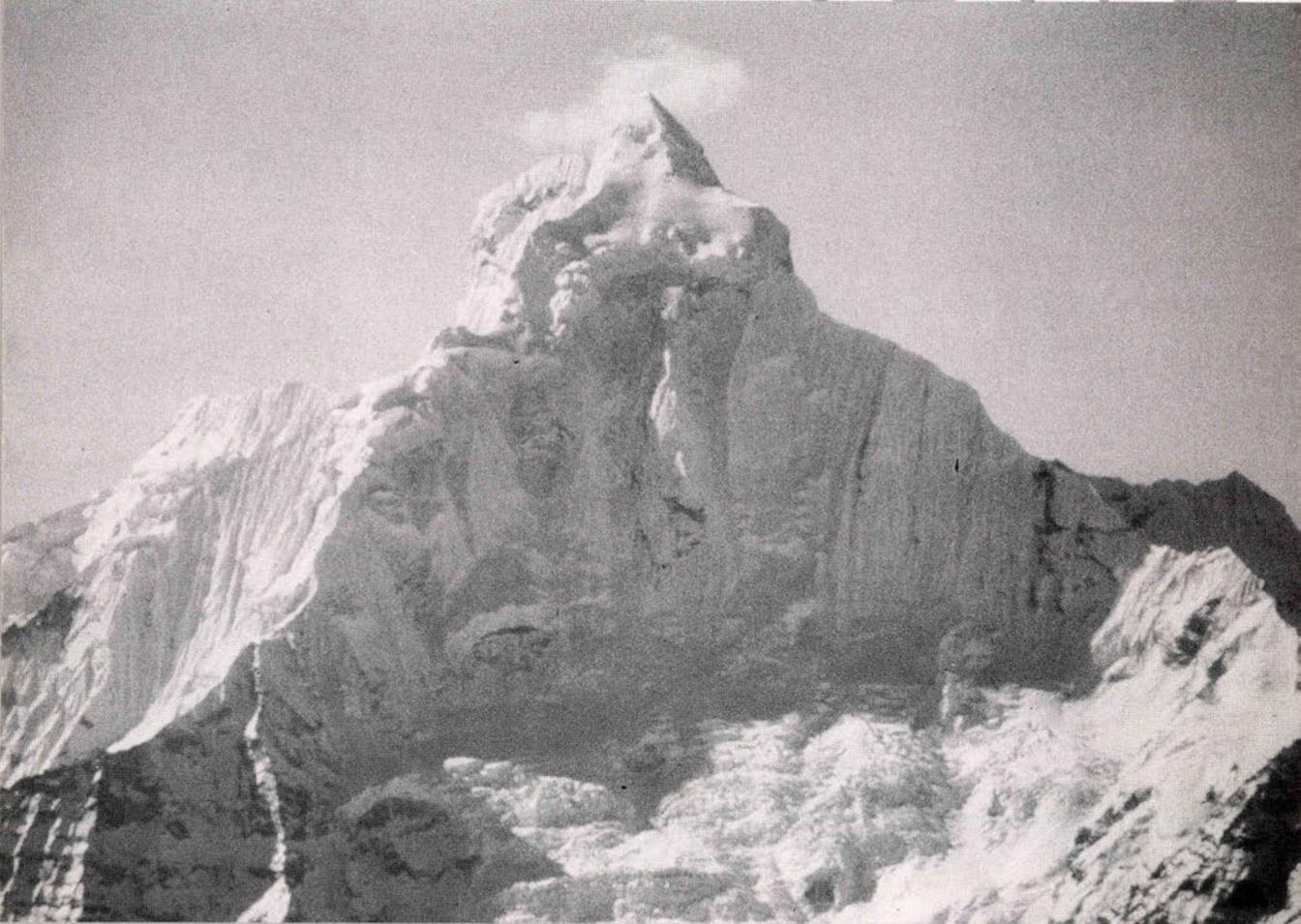


HIMALAYA

ヒマラヤ

No. 195



1988 FEBRUARY

日本ヒマラヤ協会



THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

HAJ登山隊員募集

— 世界最高峰 —

チョモランマ北壁

HAJでは、カンチェンジュンガ（1981年）、K2（1985年）と世界三大峰に足跡を残し、それぞれに成果を上げて来ましたが、いよいよ最高峰に挑戦することになりました。世界の最高峰は、南北共に登山申請が殺到しており、許可取得も困難になっております。HAJの仲間での最高峰を舞台に素晴らしい登山を展開し、今後への可能性を試みようではありませんか。

記

時 期 1989年8月15日～10月31日

ル ー ト チョモランマ（中国側）北壁

登山方法 参加隊員のレベルに合わせて幾種類かの方法を組み合わせる事もある。

負 担 金 150万円

資 格 ・冬山登山経験5年以上のHAJ会員。

・高所登山経験者（未経験の方は高所登山に準じる国内登山経験を有する方）

申込み先 HAJ事務局まで

〆 切 り 1988年5月31日

隊員決定 実行委員会にて決定

表紙写真

長い雪壁を登り終えて西稜に飛び出すと、眼前にロールワリンの盟主、ガウリサンカール(7,134m)が、恰も怪鳥が羽撃くような姿で眺められた。ネパール政府は昨秋から同峰を登山禁止とした。

(日中友好ラブチェ・カン合同登山隊 森山安次)

ヒマラヤ No.195

1. PEOPLE ————— 九里徳泰
2. インドヒマラヤ1987年
6. 高齢化が押し寄せるヒマラヤ登山 ————— 山森欣一
8. 高所での死 ————— CHARLES S. HOUSTON
11. ヒマラヤニュース<地域ニュース・トピックス・ヒマラヤから・インフォメーション>
15. ヒマラヤ登山入門 インド・ヒマラヤ編(8)
18. 連載 中国の少数民族(9)南チベット ————— 山森欣一
21. FESTIVAL OF INDIA JAPAN 1988①
24. 寸感・事務局日誌

最近、わが国でもサイクリスポーツが、ジョギングに次ぐ大衆スポーツとして人気を集めだしている。この世界的に益々高まるサイクリスポーツ熱は、今や世界の屋根・ヒマラヤにまで押し寄せており、チベットのテンドリ高原やチャンタン高原などで世界のヒマラヤン・ライダーを見うけるのも珍らしくなくなった。

この広大なチベット高原を東から西へ、北から南へと自由にペダルを踏みまくっている日本人がいる。

中央大学サイクリング同好会の九里徳泰さん(21)は、1986年夏、単独でチベットのラサからチャンタン高原、聖地カイラス山へと自転車を走らせ、新疆ウイグル自治区のカシュガルまで約3,100kmを走破した。さらに1987年2月～3月にかけては、ラサからチョモランマのベース・キャンプを経由してネパールのカトマンズまで冬のチベット高原を走破するなど(弊誌190号で紹介)アクティブにペダルを踏み続けている。

その九里さんが、今度はヒッチハイク等を混えながらチャンタン高原からクンジェラブ峠を超えてパキスタンに至る。文字通りのヒマラヤ横断を為遂げた。1987年夏、早稲田大学探検部第2次西チベット民族探査隊(総勢4名)に加わっての旅遊である。

この一行の足どりを辿ってみると、7月19日に大阪を出発した4人は、上海に入国した後、空路ラサに入り、ラサで中国製の自転車を購入して出発準備を行った。ノン・パーミッションでの自転車の持込みは年々厳しくなり、今回は已む無く、足の確保は現地調達に切り替えたという。

ラサからは、シガツェ～ラゼー～チャンタン高原(北ルート)～獅泉河～門士～カイラス山へと辿ってから普蘭を中心に約2週間滞在する。九里さんは、現在、「チベットとネパールの経済交流」をテーマに卒論に取り組んでおり、今回の自転行の目的の一つには、この調査活動も含まれていた。

普蘭からは新蔵公路をカルガリック迄辿り、此方からヒッチハイクで西域南道をホータンへ行き、



さらにコルラ～ウルムチへと辿る。ウルムチからは空路、イーニンへと飛び、イーニンから定期バスでクチャン～カシュガルへと南下する。

カシュガルから再びペダルを踏んでクンジェラブ峠に向い、10月3日、峠を越えてパキスタンに入った。峠越えは夜になった為、翌朝、また峠へ登り返して記念写真を撮ってきたとの事。

ギルギット～ラワルピンディ間のカラコルム・ハイウェイはチラス付近の道路崩壊のためギルギットからは他の外国人旅行者と共にパキスタン空軍の輸送機で運ばれたと云う。また、カラコルム・ハイウェイの道路補修にウルムチからの出稼せぎ者が居たのには驚かされたと云う。

こうして7月20日に上海に上陸した九里さんは、約3ヶ月に亘って中国大陸からパキスタンを彷徨し、10月27日カラチから帰国した。

九里さんが、自転車を本格的に始めたのは大学に入ってからと云うので、自転車歴はまだ4年。高校までは小学校から始めた剣道一筋で、3段の腕前。この剣道のお陰で旅行が出来なかったのであちこち行ってみたくて自転車を始めたと云う。自転車の良い点は、旅の先々で民家に泊めて貰ったりしながら地元の人と触れあえるのが楽しいと語る。勿論、チベットでも民家に宿泊させて貰ったと云う。

冬のチベット高原の横断では、カトマンズから余勢を駆ってイムジャツェ(アイランド・ピー6,183m)に登頂するなどヒマラヤの山の魅力にも取り憑かれつつあるようだ。

九里徳泰(くのり のりやす) HAJ会員

インド・ヒマラヤ 1987年

総 括

インド登山財団（IMF）によれば、1987年にインド・ヒマラヤを訪れた外国登山隊は68隊で、前年に比べて16隊程増加した。外国隊の内、英国が12隊で、以下日本とフランスが9隊、スペインが8隊、イタリア、ポーランドが5隊、オーストリアが4隊、アメリカ、西ドイツが3隊、スイス、ユーゴが2隊、インドネシア、オーストラリア、ノルウェー、オランダ、チェコ、ニュージーランドがそれぞれ1隊となっている。

日本隊は、1980年以降2ヶ台の人気を集めてきたが、1987年は前年より4隊減少し、ついに1ヶ台の登山隊となった。

これらの登山隊を地域別に見てみると、U・P州が36隊、H・P州が7隊、J&K州が25隊となり、相変らずガンゴトリ氷河周辺及びヌン、クン、サトパント等の7,000 m 峰の人気が高い。

目新しい記録としては、ユーゴスラビア隊がトリスルI峰（7,120 m）の西壁新ルートにアルパイン・スタイルで挑み、5月30日に全員登頂した。この西壁ルートは高差2,000 m、長さ5 kmに及ぶもので壁の斜度は45°~50°、部分的には60°以上と云われる。尚、6人のサミッターの内2人が、頂上からパラグライダーで下降した。下降に成功したMiss. Vlasta Kunaverは女性の最高所からの下降記録を樹立した。

1983年1月にナンダ・デビ内院がクローズされてからトリスルI峰に内院の外側から成功したのはこれが初めてである。

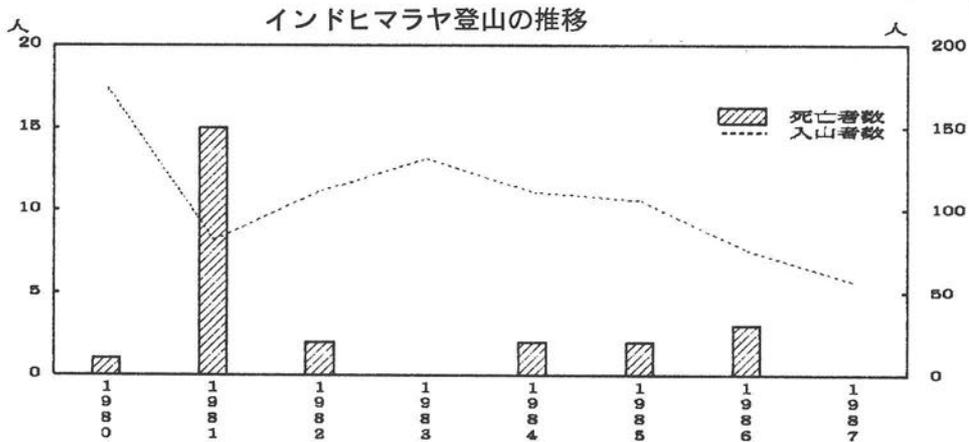
一方、7月~8月にかけてJaime Zquierdo Martinの率いるスペイン隊もトリスルI峰の登頂に成功しているようだが、ルートは定かでない。

また、クマオンのナンダ・コート（6,861 m）には立教大学の日印合同隊（太田晃介隊長ら7名、インド側2名）が挑み半世紀ぶりに再登頂に成功した。ナンダ・コートのゴリ・ガンガ側は未だ外国隊にオープンされてないが、IMFでは1936年に同峰の初登頂に成功した立教大学隊（堀田弥一隊長ら6名）に「敬意」を表して特別許可を出した。登頂50周年を記念して1年遅れの今季、再挑戦した同隊は、ラワン谷から北東稜に取りつき、初登ルートとはほぼ同じルートを辿って10月17日、18日の両日に登頂した。

この計画は、昨年の第8回インド・ヒマラヤ会議でHAJがゲスト・スピーカーとして日本へ招請したN.クマール大佐（インド陸軍アドヴェンチャー財団理事他）の口ききで話しが具体化していったようだが、いずれにしろこうしてゴリ・ガンガ側の特別許可が得られたとなると、合同隊によるパンチ・チュリ山群等の登山もやり方によっては可能性があるように思える。

1985年よりオープンとなったインド領カラコルムには、D. K. Khullar大佐の率いる印英合同隊の大部隊（イギリス側19名、インド側33名）がサセル・カンリI峰（7,672 m）とIV峰（7,410 m）に挑んだ。未踏のサセル・カンリIV峰は、西壁から6月6日に初登頂（5名）され翌7日にも3名が登頂に成功した。イギリス側が帰国の途について後、6月25日にインド側は困難な未踏の西壁からサセル・カンリI峰の登頂に成功した。同隊はこの他、6,640 mの未踏峰にも登頂して約2ヶ月半にわたる長い遠征を終えた。

一方、秋に予定していたHAJとIMFの合同によるリモ隊は、インド側の都合により、1988年夏に延期された。



シアチェン氷河

東部カラコルムに横たわるシアチェン氷河は、幅2.8km、長さ74kmにも及ぶ長大な山岳氷河である。周囲一面、太古の氷雪でおおわれた不毛の山岳地帯で、当然乍ら経済的価値など殆ど無い地ではあるが、このシアチェン氷河を巡る印・パ問題は、東部カラコルムを目指す者にとって大きな関心事である。

1984年4月14日のピラフォンド・ラの印・パ衝突以来、断続的に衝突が毎年繰返されている。此の地に於ける1987年の印・パ衝突を「HIMAVANTA」等の記事から紹介してみよう。

1987年は先ず、1月28日夕にパキスタン軍が塹壕を構築したのからんで、印パ両軍が7時間以上にわたって銃撃戦が展開された。この戦闘で死傷者は両軍とも出なかった模様。次いで、6月10日にピラフォンド・ラで武力衝突が起り、パキスタン側12人とインド側4人が死亡した。其の後、ピラフォンド・ラはインドによって奪取され、「ソナム」と改名された。

次いで7月に入ってパキスタン陸軍の特殊部隊がサルトロ・バスに近い稜線に布陣して、インドのパトロール隊を攻撃した。後にパキスタン側は撃退され、12人の将校と何人かの兵士が負傷した。この武力衝突の件は、7月3日のパキスタン国会で反対派議員から問題にされた。

パキスタン側は、このエリアの軍司令部があるカプール迄車道がのびており、シェアチン・エリ

アには容易に近づくことが可能であり、そこはサルトロ氷河の前進基地から僅か46kmの所である。さらにその先にもジープの通れる道はのびており、ナルム、ギョン、ギャリ、シアリ、チュルンへと切り開かれている。

これに対してインド側のこのエリアの軍司令部は、ラダックのレーで180kmも離れている。また、此の地に最も近いインドの飛行場は、ヌブラ谷のトイセで、このトイセからインドの前進基地までの輸送はミールを使って6～8日間もかかって補給している。

こうしたロケーションの不利をインド側は高度に優秀な装具とグラス・ファイバー製の掩蔽壕（えんぺいごう）の設置でカバーしているようである。

1987年9月23日～25日にかけてパキスタンのベンジ斥候隊とギルギットの北部辺境師団の主力は砲兵大隊の規模で、シアチェン・エリアに在る4箇所のインディアン・ポストを同時に3夜連続して攻撃した。パキスタン側は、中国製の多連続ロケット砲（2インチ）、中型山岳砲（105ミリ）、機関銃、ライフル他の多量の武器を用いて攻撃し、パキスタン側の発表によると死傷者は200人以上にのぼり、これ迄にこのエリアで起った武力衝突中で最大規模の死傷者となった。インド側の死傷者数は80人で、ロケット砲や山岳砲による犠牲者が大半であったとの事。

攻撃されたインド側のポイントは、シア・ラ、インディア・コル、ピラフォンド・ラ（ソナム）、

サルトロ・パスの4箇所のシェルターで、いずれも4,877 m～5,791 mの高所にある。当然ながら攻撃は低い位置にあるピラフォンド・ラとサルトロ・パスが激戦になった模様で、数日後に静まったと云う。

さらに10月2日には、パキスタン軍の別の砲兵隊（中隊規模）が、ピラフォンド・ラを攻撃したことも伝えられている。

こうして1987年も前年にも増してきな臭い武力衝突が起り、インド領カラコルムを巡る印・パ情勢は相変わらず予断を許さないものがある。

アルナチャル・プラディシュ州

インド政府は、1986年12月8日、9日のインド議会上下両院で、インド北東部の「ミゾラム」と「アルナチャル・プラディシュ」の中央直轄地を「州」に昇格させるとの法案を採択し、2月20日にそれぞれインドの23、24番目の州に昇格した。

このインド北東部の中印国境は、中印間の最大の係争地であり、インドがこの新しい両州の正式設置を決めた翌21日、中国外務省スポークスマンは、「アルナチャル・プラディシュ州」の設置は絶対に承認できないと表明した。

このアルナチャル・プラディシュ州の新設に端を発し、5月中旬には中国のチベット自治区とアルナチャル・プラディシュの国境地帯で中印両国軍が武力衝突したと伝えられ、チベットのラサ空港が一時閉鎖された。

現在、アルナチャル・プラディシュ州に位置するアッサム・ヒマラヤへの入域は許可されていないので、この中印紛争でインド側で登山隊が受ける具体的な問題は生じていないが、チベット側では1987年秋にインド国境近くにある未踏峰カント（7,089 m）を目指す予定だった同志社大学カント峰登山隊が、中国側から中印国境付近の緊張を理由に受け入れ困難との通告を受け、88年春以降に延期させられた。同登山隊は、同志社大学創立110周年と山岳部創立60周年を記念に計画されたもので、カント峰の初登頂と周辺の学術調査を予定していた。

西の「アクサイチン」、東の「マクマホン」と云う中印紛争の火種は当然、燻り続けそうである。

山岳道路事情

H・P州のパンギ谷にジープが走れるようになった。1987年2月1日、インドの予備工兵隊の手によってパンギ谷のサガルワズに1台のジープが空輸され、キラーから26kmの所にあるブンチからサガルワズ間の10kmをこのジープが走るようになった。

現在、ジャムのキシトワールからチャンバ地区のこのパンギ谷を通してラホルのキーロンを結ぶ道路も建設されつつある。

また、キシトワールからダクスム迄の112kmが、8月の初めにオープンとなった。

8月には、デリー～キーロン間の直通バスも運行された。

人事往来

駐インド日本大使交代

1月27日付の発令で、駐インド大使に前外務省研修所長の野田英二郎氏（59歳）が起用された。

野田氏は東大法卒で、23年外務省へ入省。香港総領事、ベトナム、ペルー大使、外務省研修所長などを歴任。

IMF人事往来

IMFの事務局に元常務理事のComdr. Joginder Singh氏（57）が就任された。尚、長らくエアー・インディアの登山・トレッキング・セクションに勤務されてた同氏は、9月で停年退職されVayudoot 航空に移られた。

これ迄事務局長と「Indian Mountaineer」の編集長を兼務されてたM. C. Motwani氏は、非常勤となって編集長のみ務めることになった。

事務局次長のS. R. Krishnan氏は退任され、後任にP. C. Katoch氏が就任した。

デリーで小型ガスボンベ発売

Kabsons Gas Appliances社からガス・カートリッジが売り出された。ボンベは1kg用と2kg用の2種類。値段は、2kg用ボンベ（ボンベ自体）が400ルピーでガス充填料は2kgで45ルピー。

Defence Colony, Flyover Marketにある「NIRULAS」と云うガス器具店で入手できる。

インド・ヒマラヤ1987年外国隊の記録

	山名	高度	国名	期間	隊長名	隊員数	結果
U P 州	シ布林	6,543m	イギリス	3/20 ~ 5/30	Mr. Mike Searle	6	×
	バズキ・バルバット	6,792m	インドネシア	4/15 ~ 5/30	Mr. Danardana		×
	トリスル I	7,120m	ユーゴスラビア	5/1 ~ 6/15	Mr. L. Vidmar		○ (West Face)
	メル	6,660m	オーストラリア	5/1 ~ 6/20	Mr. John Robert Muir		○ (Kedardom & Kedernath)
	サトバント	7,075m	西ドイツ	5/24 ~ 6/26	(German Alpine Club)		○
	セイフ	6,161m	ニュージーランド	7/1 ~ 7/15	Mr. G. H. Mc Intoch		○
	テレーサガール	6,904m	イタリア	6/1 ~ 6/30	Mr. Franco Perlotto	○	
	サトバント	7,075m	スペイン	7/1 ~ 8/5	Mr. Rafael Funks Raspal	×	
	トリスル I	7,120m	スペイン	7/1 ~ 8/15	Mr. Jaine Zquierdo Martin	○	
	シ布林	6,543m	ノルウェー	7/1 ~ 7/31	Mr. Thorbjan Enevold	×	
	スリ・カイラス	6,932m	仏・印合同	7/15 ~ 8/15	Mr. M. Biswas (Indian)	11	○ (Indian team)
	セイフ	6,161m	イギリス	7/26 ~ 9/2	Mr. Murray Hodgson	×	
	セイフ	6,161m	ニュージーランド	7/1 ~ 7/15	(Woodstock School, U.P.)	○	
	ケダルナート	6,968m	イタリア	8/1 ~ 8/30	Mr. Arturo Sergamaschi	○	
	ケダルドーム	6,830m	"	"	"	○	
	シ布林	6,543m	フランス	8/1 ~ 8/31	(Claude Jaccouk & party)	×	
	バキラティ II	6,512m	東京西部労山	8/15 ~ 9/20	山中芳樹	8	○ (East Face)
	シ布林	6,543m	チェコ・ドイツ	8/1 ~ 8/31	Mr. Ing Thomas	○	
	UP, P. 6721	6,721m	イギリス	8/29 ~ 10/10	Dr. S. J. Wheeler	○	
	テレーサガール	6,904m	スペイン	8/15 ~ 9/15	Mr. J. L. Martinoz	○	
テレーサガール	6,904m	伊勢崎山岳会	9/30 ~ 10/30	田島忠夫	9	×	
メル	6,660m	札幌登攀クラブ	9/1 ~ 10/15	長水 洋	4	× (SE Ridge)	
サトバント	7,075m	オランダ	8/10 ~ 9/15	F. M. Teseloar	×		
サトバント	7,075m	イタリア	8/1 ~ 8/31	F. Federio	○		
ナンダコート	6,861m	日・印合同	9月 ~ 10月	太田晃介	7	○ (NE Ridge)	
H P 州	ハヌマン・ティバ	5,928m	イギリス	6/28 ~ 7/25	Keith Ellis Hunter	3	○
	CB 13	6,264m	アメリカ	7/22 ~ 9/5	Mrs. Fran Morris		Abandoned
	CB 49	5,964m	名大・名工大	7/15 ~ 8/15	篠崎純一		○ CB46, 47も登頂
	KR-7	6,096m	ポーランド	7/15 ~ 8/30	Mr. Andrej Zbonski	×	
	ホワイトセール	6,445m	フランス	8/1 ~ 8/30	Latuier Andre	○	
	タイガートゥース	6,247m	ぶなの会	8/1 ~ 9/15	松島正光	13	○
KR-4	6,340m	北海道帯広隊	9/1 ~ 10/20	佐々木裕一	4	○	
J & K 州	サセル・カンリ I	7,672m	英・印合同	4月 ~ 6月	Ldr. D. K. Khullar	52	○
	サセル・カンリ II	7,410m	"	"	"		○ (Indian team only)
	ヌン	7,135m	フランス	6/15 ~ 7/15	Francois Chantalen	○	
	ピナクルピーク	6,930m	オーストリア	7/15 ~ 8/15	Mr. Carhard Mittere	×	
	ヌン	7,135m	オーストリア	7/1 ~ 7/31	Mr. G. Steinmair	○	
	ヌン	7,135m	ポーランド	7/10 ~ 8/15	Mr. Bruzdowicz Jacek	○ (East Ridge)	
	ヌン	7,135m	スペイン	7/15 ~ 8/15	Mr. Jesus Belmonte	× (North Ridge)	
	コラホイ	5,425m	イギリス	7/1 ~ 7/18	Mr. John A. Jackson	○ (and Parcha Kangri)	
	クン	7,077m	フランス	7/1 ~ 7/31	Mr. George Tsao	○	
	クン	7,077m	フランス	8/1 ~ 8/31	Mr. Phillipe Allibert	○	
	ピナクルピーク	6,930m	フランス	8/15 ~ 9/15	Latuier Andre	×	
	ラルン・ビクター	6,500m	フランス	8/1 ~ 8/30	Marquis Dominique	Abandoned	
	Z-8	6,050m	東京学芸大	8/1 ~ 8/31	竹本哲雄	5	×
	ヌン	7,135m	スペイン	8/15 ~ 9/15	Mr. Jose A. M. Rodrigues	○	
ヌン	7,135m	H A J	8/1 ~ 8/31	木下祥子	5	○ (West Ridge)	
Z-1	6,181m	フランス	8/1 ~ 8/31	Mr. Bernard Conod	×		

高齢化が押し寄せるヒマラヤ登山

山 森 欣 一

1987年のヒマラヤ登山も冬期登山の数隊を除いて終了した。今年も話題の多い年であったが、何といても世界最高峰の登頂者が冬期の僅か1人とK2の登頂者が無かったことが一番印象に残るであろう。今年のカラコルム、ヒマラヤは、総体的に天候に恵まれなかったようである。

さて、登山界もボルダリングからパラバント、マラソンなど様々な分野が採り入れられ、純粋に山に登るだけに専念する人達は、随分と少なくなってきたようだ。

この傾向は1980年代に入ってすっかり定着してしまった感がある。青年に代わって山歩きの主流を占めるのは、健康のための熟年組や、子育てが一段落した御婦人達となったように見受けられる。しかし、このような層の登山者には当然の事ながら、厳しい冬の岩壁登攀など望むべくもない訳で、今は岩壁登攀もすっかり静かな雰囲気であると言う。(私もこの7~8年冬の壁とは御無沙汰なので聞きかじりなのだが…)

このような国内登山の高年令化現象は、当然の事ながらヒマラヤ登山に影響を及ぼして来ている。ヒマラヤ登山隊の平均年令などについては、まだデータを整理していないのだが、とりあえず、7,000 m以上の高峰の登頂者から40才代の人を整理したのが別表である。

この表で見られるように、1952年から始った我国のヒマラヤ登山で、1979年までの27年間で40才代の登頂者はわずか7人だったのであるが、1980年代に入ると毎年2~3人となり、1985年から3年間だけで20人(実質19人)に達しているのである。

更に、この3年間を見ると、同じ隊から2~3人と40歳代の登頂者が出ていることがわかる。これはとりも直さず、隊の高年令化現象が進んでいることの証左であるに違いない。

高橋和之の8,000 m峰2座登頂や原真の48才での新しい試みによる8,000 m峰登頂、新郷信廣の

2座初登頂などは注目すべき記録である。

表にはないが、6,000 m級ではイムジャツエ(アイランド・ピーク、6,160 m)に1981年に登頂した藤田博(62才)脇鉄雄(59才)が最高年令である。又、1983年にツクチュ・ピーク(6,920 m)に登頂した嶋村美美江は50才であったし、バギラッティ I (6,856 m)に登頂した高林久歳は54才であり、素晴らしい記録であると言える。

2~3年のうちには、7,000 m級でも50歳代の登頂者が名乗りを上げそうであるし、6,000 m級では50歳代だけの登山隊も派遣されると聞く。更には、世界最高峰へ50歳代で挑戦しようとする企わだても有るやに聞く。

話は横道にそれるが、登頂こそしていないが、40歳代で果敢に無酸素登山を続けている人がいる。小西政継だ。1980年41歳ではカンチェンジュンガを8,400 mまで。1982年43歳ではチョゴリを7,850 mまで。1983年エベレストでは44歳で何と8,750 mまで到達しているのである。その執念には敬服する。

こうなると実年パワーの充実した登山に敬意を表したいところではあるが、反面、昔、活躍した人々が頑張っている割には、次の世代の層が薄いような気がして淋しい気持も起きる。

私達のもっともっとヒマラヤ登山の楽しさや、素晴らしさを声を大きくして語っても良いと思う。あまり方法論ばかりが語られて、実践が先細りになることを憂う。

実年(40歳代)の7,000m以上の峰の登頂者リスト

1987年12月1日現在

番号	氏名	生年月日	登頂日	年令	国名	山名	標高	備考
1	今西 寿雄	1914.	1956. 5. 9	41	N	マナスル	8,163m	◎日本唯一の8,000m峰初登頂
2	太田 欽也		1975. 8. 12	40	P	テラム・カンリⅢ	7,409m	◎
3	白旗 史郎	1933.	1976. 8. 8	43	S	コムニズム	7,495m	日本初のパミール登山
4	内田 嘉弘	1937.	1977. 8. 8	40	S	コムニズム	7,495m	
5	吉尾 弘	1937.	1978.10.20	41	N	パピル	7,052m	◎
6	小笠原 進	1939.	1979. 7. 17	40	P	プマリ・チッシュ	7,492m	◎
7	水越 武	1938.	" 7.30	41	P	シア・カンリ	7,422m	
8	田部井淳子	1939.	1981. 4. 30	41	C	シシャパンマ	8,012m	世界初の女性による 8,000m峰複数登頂
9	日野 悦郎		" 5. 7	40	N	ニルギリN	7,061m	
10	上尾庄一郎		1982. 4. 22	43	C	カン・ベン・チン	7,281m	◎
11	西山 孝		" 4. 22	40	C	"	"	◎
12	原 真	1936.	" 7. 31	45	S	コルジェネフスカヤ	7,105m	
13	原 真	1936.	" 10.10	46	C	シシャパンマ	8,012m	
14	三原 洋子	1941.	1983. 8. 24	42	I	サトパント	7,075m	
15	高橋 晴夫	1943.	" 9. 30	40	I	サトパント	7,075m	
16	高橋 和之	1943.	" 10.11	40	N	ローツェ	8,516m	
17	出口 當	1942.	1984. 5. 20	42	B	ジチュダケS	7,000m	
18	近藤 和美	1941.	" 8. 6	42	S	レーニン	7,134m	7/31にコルジェネフスカヤ (7,105m) 登頂
19	新郷 信廣	1943.	" 9. 15	41	I	マモストーン・カンリ	7,516m	◎
20	小林 昭一	1941.	1985. 4. 29	44	N	グルジャ・ヒマール	7,193m	下山時死亡
21	高橋 和之	1943.	" 7. 28	42	S	コムニズム	7,495m	7/21コルジェ 8/6 レーニン登頂
22	原 真	1936.	" 7. 29	48	S	"	"	7/21コルジェ 8/6 レーニン登頂
23	田部井淳子	1939.	" 8. 7	45	S	"	"	7/28コルジェ 8/15レーニン登頂
24	松原 繁		1986. 5. 10	43	C	チャンツエ	7,553m	
25	宮本 義彦		" 5. 10	41	C	"	"	
26	近藤 和美	1941.	" 8. 3	44	S	コムニズム	7,495m	8/9 コルジェ 8/15レーニン登頂
27	三原 洋子	1941.	" 8. 16	45	S	ムスターグ・アタ	7,546m	
28	新郷 信廣	1943.	" 10.14	43	C	カルジャン	7,216m	◎
29	小野寺光義	1945.	" 10.14	40	C	チャー・ウイ	7,354m	◎
30	日野 悦郎		" 10.16	45	C	チャー・オユー	8,201m	ネパールの許可で中国側から登頂
31	福沢 勝幸	1940.	1987. 4. 18	47	N	ランタン・リ	7,205m	
32	山本 大三	1944.	" 4. 18	43	N	"	7,205m	
33	尾崎 啓一		" 8. 12	46	C	ムスターグ・アタ	7,546m	
34	高橋 和之	1943.	" 9. 21	44	C	チャー・オユー	8,201m	頂上からパラパント滑空
35	大谷 映芳		" 9. 21	40	C	"	"	
36	高橋 通子	1942.	" 9. 22	45	C	"	"	
37	大橋 良雄		" 10.14	43	N	プモリ	7,161m	
38	出口 當	1942.	" 10.26	45	C	ラブチュ・カン	7,367m	◎
39	小川 貞夫	1946.	" 10.27	40	C	"	"	◎

(注) 国名の略はN=ネパール、P=パキスタン、S=ソ連、C=中国、I=インド、B=ブータン

高所での死

CHARLES S. HOUSTON, M. D.

1986年のヒマラヤは、とてつもない出来事と悲しい出来事が起り、忘れられない年となった。

世界的に第一線級の登山家が、8,000m 峰14座を完登し、2人のスイス人は、無酸素でテントも持たず、飲まず食わずで43時間かけてエレベスト北壁ダイレクト・ルートに登った。また、25人がK2に登頂したが、その間7人が、その他6人と共に死んだのである。その他の高峰でも世界的に偉大な何人かの登山家が命を落している。その死の大半は避けることが出来たのであるが……

とんでもない行動、極度の競争意識そして山の道理を無視することもまた当然となってきた。それらの幾つかの行為は、数年前であれば登山家同志によって否定されたであろう。然し、これは他人の議論する問題であって、私の関心事は、彼らが肉体的作用を無視したことであり、また、その無視したことを乗り越えることの出来る可能性についてである。

私は2年前にこのジャーナル誌上で、高所での健康と病状について、何が判っていて、何が想像の域を出ず、何が知らないのか、最新の進捗状況を論じた。其の後、我々はほんの少ししか知ることがなかった。然し、山に何度も登るために長生きしたい人にとってみれば、基本を繰り返して述べる事も価値のあることであろう。

6,000m (註1) 以上の高所では、幾つかの死の臭いのする危険に直面する。酸素不足、寒気、脱水症状、疲労が最も油断のならないものであり、危険な要素でもある。そしてこれらの要素は互いに競合して、他の要因を大きくしてしまう。それらは登山家の判断力、知覚能力、調整機能と云ったものを早くしたり、著しく鈍らせたりして思考能力を麻痺させ、意のままに死へと導いてしまう。そして、それは殆ど是正されることなく、強い登山家であれ、最高の登山家であれ、誰も免れることは出来ない。

誰しも、アルコールは自分の高度な能力を低下

させることを知っている。幸いにも大抵の人はアルコールの嗜み方を知っており、深酒による弊害から守ることを知っている。酸素不足も全く同様であるが、日常経験することがないために、自分達には関係のない事と考えられている。然し、6,000m以上の高所では(大抵の人にとっては、6,000mよりずっと低い高度になるだろう。) 高度によって身体が害されるが、通常どの程度か判らない。体内の酸素欠乏はゆっくりと進行し、警告を無視すれば、身体の機構は壊れてしまうのである。

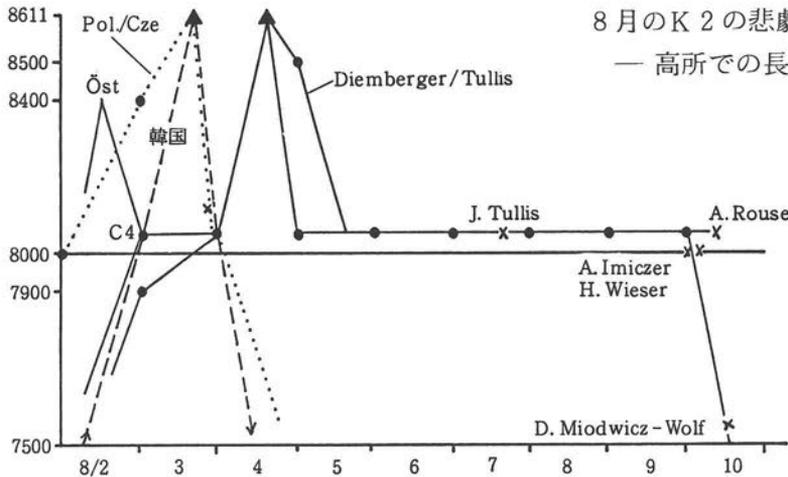
よく認知されてない事は、体内の酸素不足が進行すると寒さに関する弊害、即ち凍傷と体温低下と云う二重の危険に陥ることである。体温低下によって、酸素不足と同じように頭がやられ、過ちを犯してしまう。この両方の作用で軽率な登山家を気の効かない行動へ落し入れ、動くことは出来ても、はっきり考えられなくなったり、水のような基本的必需品に頭が回らなくなったりするのである。

高所で、その次に来る3番目の要因は脱水症状である。希薄で乾燥した空気は、肺と皮膚から水分を知覚症状も無いまま極度に取り除いていく。脱水作用で血液は濃くなって流れが悪くなり、同時に赤血球で運ばれる酸素量が少なくなるため赤血球数が増加する。それが更に進行すると細胞に酸素が回わらなくなる。濃くなった血液は固まり始め、手足への血流を妨げるようになり、致命的なこととしてそれが次第に肺へと移っていくことである。また、十分な水分がなければ、腎臓の機能は働かなくなり、順応は遅くなる。そして、もし血液の量が甚だ少なくなると血圧は低下し、体内酸素濃度は低くなり、寒さの弊害をきたすことになる。

高度が高くなるにつれて吸込む空気の量は多くなる。実際、これは身体が酸素の希薄な所で順応するのに最良の方法である。然し、冷く乾燥した空気を吸込む度に体内から水分と熱が奪われる。

8月のK2の悲劇

— 高所での長期滞在が死を招いた？ —



つまり、最初、体内に流れ込んだ空気を体内温度まで温め、次に粘膜から水分を蒸発させてこの空気を飽和させるのである。多量の熱が失なわれて、どんな服を着ていようと暖かさを維持することが難しくなる。

身体は、熱を造り、行動し、そして生き続けるためにも燃料を燃やさなければならない。第4の危険因子は体内の酸素欠乏によって助長される体力の消耗である。これもまた、食欲の低下をもたらし、吸収機能を落す原因である酸素不足とからみ合っている。食物を摂取することが困難であれば、体内の貯蔵分は底を尽いてしまう。食事を取らない登山家は、時々自分の細胞を食いつぶしてしまう。然し、食いつぶしてしまったり、エネルギーが早急に必要の時、燃料は直接役に立たない。筋肉は頭と同様にうまく動かないのである。

何故、このような明らかな危険要因を度々無視するのであろうか。明らかに酸素不足と寒気が頭の回転を鈍らせるためにその要因が大きく強まって、それらの影響力が急速に膨れ上り、致命的なものになってしまうのであろう。その要因は6,000mを超えた高所では誰しものが影響を受けるのであるが、すべての神経・体力を緊張させて登るアルパイン・スタイルのような極限下の登山では、クライミングに力を注ぐため警告を発している危険信号を感知し、それに留意することもないままより大きな危険へと陥ってしまうのであろう。

K2での恐い出来事を分析すれば、生き残った人は勿論の事、犠牲者もひどい脱水症状にかかり、体内の燃料もなくなり、酸素不足でぼーっと

して、当然の事乍ら熱も奪われてしまったことを想像することは容易であろう。死亡の原因は、体内酸素濃度低下、脱水症状、体温低下、それに間違った判断・行動と不運の積み重なりであろう。彼らは十分な食料と燃料を持ち合わさなかった。無計画な突撃により多くの人間が少ないテントに集まってしまった。小さなテントに詰め込まれ、入りきれなかった人は雪洞の中にうずくまって、寝不足、寒気、疲労、酸素不足のために彼らの体力は弱らされていった。

他のパーティや単独行者がフィックスしたルートを侵害したり、スリングを作るためにロープを切断するなど頂上アタックのための利己的な略奪もしばしば見かけられる。口論してパーティがバラバラになったり、知らない人と一緒に登ったりする。体力のない人は取り残され、一人で下らなければならなくなる。皮肉なことに悲劇の多くは1953年に我々が同じような状況を違った方法で切り抜けた(註2)、まさにその場所で、同じ1週間の間に入ったのである。

では、この事件からアルパイン・スタイルは非難され得るであろうか。否、決してそうではない。経験を積んだパーティ(複数の人間より成立っていなければならない。)は、うまく順応し、良く食べて休息を取り、水分を十分に取って、適切な日とルートを選んで、数年前には予想も出来なかったような事を為遂げるのである。エベレストに挑んだスイス人のペアは、そんなパーティの為得る事を示してくれた。然し、彼らは大変幸運に恵まれた。突然の嵐もなければ、落石によるケ

がもなく、コンロの調子もよくて、死ぬことはなかったのである。どうかして彼らはピーター・テクストン(註3)、クリス・チャンドレー、その他大勢の人間を当たらずとも遠からず殺した高所肺水腫、高所脳浮腫からも逃がれることが出来たのである。

これは我々に大きな問題提起をしている。とんでもない事を試みた人がケガ・病気もせず、一方では高山病に苦しんだ人が居ると云うのは何故であろうか。何人かの世界的な登山家が、ある場所で倒れているのに、その一方では倒れないで済んだのは何故なのであろうか。誰がうまく順応できるのか、また、各個人個人の体調が今日、明日良くなるのか、悪くなるのか、我々はいったい予想できるであろうか。残念ながら不可能である。これらの答は今後見つけなければならない。

こう云った信じ難いようなアルパイン・スタイルでの登山は、我々に多くのことを教示してくれる。80年前、6,000m以上の高所で一夜を明かすことができると信じていた人は、ほんの一握りしか居なかった。

20年前、大抵の生理学者は高度順化のためには時間をかけてゆっくり登るスタイルが、登山上、唯一安全な方法だと信じられていた。この10年間の内に高度順応の方法が発達し、もし、登山家が5,000m～5,500mの高所で数週間過し、その数千フィート(訳注:300～500m位か)上に度々登ったり、ベース・キャンプに戻ったりする事は、良く知らないために引き起される高度障害を最少に押えることができ、おそらく順応の方法としては最良であろう。私は、中程度の高さにある居心地の良いベース・キャンプから数週間で登山する方法が、包囲法で大きな山をゆっくり登る方法よりも高度順応をより完全なものにすると云う説得性のある証拠を知っている。然し、登山家が高度順応のための数週間を省こうとすると、高山病による死の危険に陥るであろう。

包囲法もまた、危険を伴っていることを我々は頭に入れておかなければならない。じわじわと高度を稼いでいく登山者にも、同様の潜在的な死への要因がしのびより貯えられていく。初めの内は高度順化が完璧かも知れないが、超高所では障害

が順応を凌ぐ問題となろう。パーティは、メンバーが各自の貯えを温存しなければ、体力、情熱を失って燃え尽きてしまうかもしれない。超高所での長時間滞在は、短時間の高度経験と同じくらいにまずいのかも知れない。それは、各々のパーティなり、メンバー各自が自分らのペース及びリズムを見つけないければならない事を意味している。

危険に対していつでも敏感になり、判断力、知覚力は常に鈍くなることを知って、寒気、脱水症状、体内酸素濃度低下、疲労などによって鈍くなった機能を案じながら、断念、再挑戦を繰り返せば真の大きな危険をコントロールすることが出来る。

何度も登ろうと考えているアルパイン・スタイルのクライマーは、危険要因に対して抽象的に注意を払うのでなく、その要因が自分にどう云った影響を与えるのか、と云う事に常に注意しなくてはならない。

(American Alpine Journal Vol 29, 1987)

(訳:福島弘薫)

(註1)原文では20,000フィート(6,096m)と記されている。ここでは、目安の数字として6,000mとした。

(註2)1953年のアメリカ隊は、8月2日にチャールズ・ハウストン隊長以下8人のクライマーが10日分の食糧・燃料をストックしてCamp 8(7,770m)に顔を揃えた。然し、その夜から風雪が荒れ狂い8人はC8に閉じこめられてしまった。7日にギルキー隊員が血栓症に倒れ、10日に悪天候についてギルキーの救助活動が開始された。下降中、C7の近くでスリップするアクシデントでギルキーは雪崩にさらわれてしまう。一行はさらに4日を要してC2迄下り、そこでBCから上がってきたポーター達に迎えられ、全員がBCに帰り着いたのは、実に8月15日のことだった。

(註3)イギリスの登山家で医師。1983年、カラコルムで4,000mのBCからロブサン・スパイアー(5,709m)に登頂後、別のBC(5,000m)へ移り、そこから6,700mのCOLに登った後、ブロード・ピーク(8,047m)にラッシュで挑み、頂上直近かで高山病を発病、下降中、7,500mのキャンプで肺水腫のため死亡する。

地域ニュース

《 パキスタン 》

K 2 初の冬期遠征隊

エベレストの冬期初登頂を成功させたポーランドのアンジェイ・サヴァダが、今度は国際隊を率いて初の冬期K 2 登山を目指して現地入りしている。

スカルドへ出発する前の12月7日夜、イスラマバードのホリデー・インホテルで記者会見を行なったので、その模様を12月8日付パキスタン・タイムスから紹介してみよう。

ザヴァダの率いる30人の強力な遠征隊は、ポーランド、カナダ、イギリスの登山家(20名)及び医師(5名)、カメラマン(5名)によって構成され、一行は12月10日にスカルドに向けて出発した。

K 2 の冬期初の試みは、5,200 m のベースキャンプからアブルツィ稜を経て2月中旬迄に登頂する計画である。

一般にK 2 は世界で最も困難な山と考えられており、それはエベレスト以上と云われている。1954年にアルディート・デジオの率いるイタリア隊によってK 2 の初登頂はなされたが、然し、K 2 の冬期登攀についてはこれまでに誰も試みた者はいなかった。とザヴァダは語り、成功のチャンスは5分5分であると云う。

これまで冬期ヒマラヤの8,000 m 峰には44隊が挑んだ内7隊が成功している。この7隊のうち6隊はポーランド隊であり、その4隊はザヴァダが率いたものである。(註)

1982年から開始された今回の歴史的なプロジェクトは、ザヴァダとカナダ人のジャコス・オレック(副隊長)とのバルトロ氷河の冬期偵察行やポーランド・カナダ合同隊による1985年2月のチャー・オー冬期初登頂などを通して苦心しながら組織作りがなされてきた。

そして、1986年、パキスタン政府はK 2 の冬期登攀の許可を与えてくれた。

1987年夏、必要な全ての装備、医薬品がカナダ

に集められ、パキスタンへ船積された。

9月にバルトロ氷河のベースキャンプまでの長いキャラバン(250 km)を始めるべく、食糧と装備がスカルドへ輸送された。然し、アスコレ地方の収穫時期が遅いため先発隊は必要なポーター数を集めることが出来ず、この時点で遠征隊は最初のつまずきを経験した。先発隊は已む無く、僅かなポーター達と共にウルドカスへ向ったが、このポーター達もウルドカスから全員戻ってしまった。

この決定的な局面を迎えた遠征隊は、この時点でハク大統領と当局に対して緊急の訴えを起し、残りの隊荷をヘリコプターでベースキャンプ迄輸送してくれるよう依頼した。この援助はハク大統領の同情に溢れた寛大な支持によって可能となり、装備類は既にベースキャンプへの途上にある。

遠征隊の総予算は、100万ドル以上になるものと見積られている。

登山計画については、約15日間程を費して5,200 m 地点にベース・キャンプを設営した後、来月かその前後には一連の上部キャンプが建設される予定との事。

計画では、遠征隊は2月上旬には頂上を狙えるだろうと語り、彼の経験から若し、この期間内に頂上に立つ事が出来なければ、次第に難しくなり、且つ、登頂は不可能となるであろうとも語った。また、冬のK 2 では、気温は-50℃位まで冷込み、風は昼間でも毎時150 kmを超えて吹き荒れるなど登山条件は容易なものではないことも付け加えた。

いずれにしろアプローチ等の条件を含めてエベレスト以上の困難を強いられそうである。

この遠征隊は、ポーランド、カナダ、イギリスの3国はもとより世界17ヶ国の企業がスポンサーとなってこの世界的イベントを支援した。

尚、この遠征期間を通じて、“冬期登攀”と名づけられた映画が同行する専門カメラマン達の手によって製作される。

(註：H A J の資料では、1964年～1986/87冬期までの間に冬期8,000 m 峰登山を目指した登山隊は50隊で、その内13隊が登頂に成功している。)

レスキュー費用デポジットの念書

パキスタンの登山申請に際して、これまでの必要書類（英文アプリケーション、日山協の英文推薦状、登山料の支払い証明書）の他に「レスキュー費用デポジットの念書」を添付しないと在日パキスタン大使館で受理して貰えなくなった。

これは、レスキュー費用として4,000ドルを入山前に在パキスタン日本大使館かパキスタン文化スポーツ観光省観光局へ必ず預託する旨の念書で、従来は、登山隊がイスラマバードに到着後、在日日本大使館からレスキュー費用の保証書を書いて貰い、それを観光局でのブリーフィング時に提示すれば良かったが、1987年からアプリケーションの提出時に添付しなければならなくなった。

《ネパール》

冬期アンナプルナ南壁初登攀

冬期アンナプルナI峰（8,091m）の南壁イギリスルートに挑んでいた群馬県山岳連盟隊（八木原閉明隊長ら13名）は、12月20日午後3時に山田昇（37）、斎藤安平（34）、三枝照雄（30）、小林俊之（21）の4隊員が登頂に成功した。

然し、登頂後、C4へ下山中の午後4時45分に7,900m付近で小林隊員が、同8時に7,420m付近で斎藤隊員が相次いでスリップし、行方不明となった。

27日朝に、山田隊員がヘリコプターに搭乗して空中から捜索したが手掛かりは見いだせなかった。

一方、北面から冬期登頂を目指したカモシカ同人隊（大蔵喜福隊長ら4人）は、登頂を断念した。

トピックス

第8回ヒマラヤン・ラリーで日本人優勝

世界各国から96台の参加を得た「第8回ヒマラヤン・ラリー」が去る10月27日から11月1日までの6日間、デリーを中心に北インドで行なわれ、日本人ドライバーがこのラリーで初優勝を飾った。

同ラリーは「第2のサファリ・ラリー」として

知られており、インド平原から雄大なサブ・ヒマラヤの山々をステージとして約3,000kmの過酷なコースを走るレースである。

コースは第4ステージに分かれ、第1ステージは、デリーのネルースタジアム～ナイニタール（約600km）、第2ステージは、ナイニタール～ムソウリー（約1,000km）、第3ステージは、ムソウリー～シムラ（約630km）、第4ステージは、シムラ～デリー（約640km）の各ステージで競われた。

優勝した篠塚建次郎さん（39歳）は、三菱自動車工業海外企画部広報宣伝グループ及び乗用車営業本部ギャラン営業課の主任を兼任されており、今回のラリーには自社のスタリオンで参加し、日本人で初の優勝に輝いた。尚、2位も同グループのスタリオンが占めた。

これを記念して去る12月18日にインド政府観光局主催のレセプションがインド大使館で開催された。

当日は、篠塚さんの体験談を中心にヒマラヤン・ラリーのビデオが上映され、優勝チームへの記念品の贈呈などが行なわれた。

シェア・カーン氏来日

パキスタンの名クライマー、シェア・カーン氏（34歳）が、東洋大学K2登山隊の招請で12月9日、初来日された。

シェア・カーン氏は、1976年のナンガ・パルバット・ルパール壁を皮切りに、翌'77年は日本山岳協会のK2隊に連絡官として加わり、若干23歳の若さで南東稜の7,490mまで登る活躍を見せた。'78年には防衛大との合同でパス・ピーク（7,284m）に初登頂している。'79年にはポーランドとの合同でラカボシ（7,788m）北西稜に初登。'81年にはGII（8,035m）登頂。翌年はR・メスナーと共に、ブロード・ピーク（8,047m）、GIIをアルパイン・スタイルで連続登頂。'84年は東洋大学との合同でユクシン・ガルダン・サール（7,530m）に挑み、第2登を果たしている。'86年にはGIIに3度目の登頂を為し、'87年は東洋大学・パキスタン山岳会合同K2登山隊の副隊長として、参

加し、南東稜の8,350 m迄達した。

これら数々のカラコルムでの功績が認められ、'86年にパキスタンのジアウル・ハク大統領から「名誉ある行為」賞を受けている。登山家でこの賞を受賞しているのは、'60年にジャベド・アフタル大尉、'82年に日本でも良く知られているK2サミッターのアシュラフ・アマン氏とナジール・サビル氏に続いて4番目である。

パキスタンの国民的英雄とも云える氏は現在、将校訓練学校の教官を務め、且つ、パキスタン山岳会の中心的存在として活躍している。

9日に来日された氏は、10日に行なわれたK2登山隊報告会及び故鈴木章氏を偲ぶ会に出席された後、都内観光、京都・大阪観光、スキー行、箱根など日本各地を観光され、12月21日、JAL-471便にて離日された。

ヒマラヤから

冬期バルトロ便り

お忙しい毎日の事とっております。

12月4日夜、シルクロード（空港に督永さんが出迎え）入りしまして、現在、準備活動しております。明日9日にスカルドへ飛び11日～12日頃にキャラバンをスタートさせる予定ですが、ポーターがどうなるか判りません。

冬期K2国際隊（ポーランド、イギリス、カナダ）は、3隊に分散して入山する計画で、1隊は既に秋に入山。2隊目は11月初旬にスカルドを出発したもののウルドカス手前でポーターが帰ってしまい、ウルドカスからは軍のヘリコプターでBCに輸送するハメになったようです。然し、軍のヘリコプターは1度に100kg程度しか運べず、なかなかちががあかない様子です。3隊目はザヴァタ隊長等ですが、12月7日にスカルドへ飛んだ様子です。どうしても50名程のポーターを確保したくハイ・ポーターに準ずる装備を支給する条件でポーターを集めているとの事ですが、予定のポーターが確保されていない。と云う情報も入っております。

この様な状況から、以前は張切っていた、と云

う我々のガイド、モハメット・アリも初めて顔を合わせた時はジョンポリとしていました。兎に角ポーターが集まりそうもないのが原因のようです。ガイドの話しやシア・カーン氏（本年の東洋大隊のK2や昨年登歩溪流会隊のG I等の連絡官）の話しによると、我々の考えと同様に、冬期バルトロ氷河は積雪よりも寒さの方が問題のようです。

取り敢えず、ポーターの支給品として羽绒服、ジャージ等をサンディー・マーケットやピンディーのバザールで何とか確保出来ました。一定の装備等を支給して何とかウルドカス迄とも思っておりますが、最悪の時はリリゴ又はアスコレ迄とも考えております。それから先は、登山の原点にかえって2人で行動します。

冬期K2については、早目に申請した方がベターとの事ですので、1月にイスラマへ戻った時に仮申請を提出したいと思っております。

それでは皆さんに宜しくお伝え下さい。取り急ぎ現況迄

1987. 12. 8. 飛田和夫

アッサラームレーコン

年末で何かと慌ただしい事と思います。

昨日、飛行機（CD）でスカルド入りしました。ナンガより少し高めの飛行で、ディアミール側や北面、それにバインター、ラトック山群、K2、ブロード・ピーク、マッシュャブルム等々カラコルムの素晴らしい飛行を満喫しました。もう少し時間が長いといいのですが。スカルドは雪も無く、気温も朝夕が5～6℃で、日中、太陽が出ていると日向ポッコに丁度良い位です。然し、朝太陽が出ないとなかなか動きたくないですね。何とかポーター7名も確保されており、ウルドカスまでは兎に角行けそうです。

国際隊は今日、スカルド入りしたそうですが、未だ会っておりません。ナジールは忙しく動いているようです。

ポーターが帰る時に再度、メールが出せそうです。それでは明日、スカルドを出発します。

1987. 12. 10. スカルドにて 飛田和夫

冬期アンナプルナ南壁便り

ナマステ!!

ラプチュ・カンの初登頂おめでとうございました。山森隊長ご苦勞様でした。ラサでは同じ少数民族としてチベット人と共に戦われたことでしょう。何人登頂されたのか等、詳細は判りませんが、偵察隊としても一安心しております。

さて、アンナプルナ隊ですが、テント・ピークとグレッシャードーム方面での2回にわたる高所順応訓練も終え、いよいよ明日から登山開始です。ぼちぼち風が吹き始めており、頂上稜線には雪煙が舞っております。長いことアンナ南壁を眺めているせいか、大きさも傾斜もそれほど感じなくなりました。この赤い岩壁に全力でぶつかります。八木原隊長、宮崎副隊長、山田登攀隊長、他隊員一同皆、元気です。

Annapurna BC 30. 11. '87

齊藤安平

冬期アンナプルナ南峰便り

11月19日に全員がカトマンズに集結致しました。境町山の会のプモリ隊、青森岳連のマナスル隊が相次いで帰国していき、20日にはアンナI峰の山田昇様がドクターとリエゾンを連れて出発していきました。何と八木原さん達は、リエゾンを連れずに既に入山しております。観光省で八木原さんが、「リエゾンは俺がやる」と云ったとか……

私達も全員が同レベル(低い)の語学力のためハラハラの連続ですが、何とかやっております。20日にリエゾンも決りましたが、21日、22日と休みが続いて仕事にならず、ポカラへの移動は24日となりそうです。

取り急ぎ近況のみ

カトマンズ、エクスプレスハウスにて
11/21 白峰会アンナ南峰隊 たでの

インフォメーション

第26回海外登山技術研究会

(社) 日本山岳協会主催

恒例の日山協・海外登山技術研究会が下記の形で開催されます。

この研究会は、これまで主にヒマラヤの高峰登山を対象として、高所医学、ヒマラヤの気象・地形・氷河、タクティクス、高峰登山家の体力科学とトレーニングなど、その時代、その時代に即した幅広いテーマで報告及び研究が行われてきた。最近では、アルパイン・スタイルによる速攻登山、8,000 m峰の無酸素登山、冬期8,000 m峰登山などが主テーマとして取り上げられ検討が重ねられてきました。

今年度(第26回)は、「高峰登山の攻撃と防御」(パート2)として、高峰登山のための低圧訓練、高峰登山家のスタミナとトレーニング、冬期ヒマラヤ登山隊の報告(冬期バルトロ氷河、冬期アンナプルナ等)、ヨーロッパ・グランプリ報告等が行われる。

期 日

昭和63年2月20日(土)～21日(日)

場 所

八王子大学セミナーハウス

八王子市下柚木1987-1 ☎0426-76-8511

交 通

京王線北野駅下車 } 京王バス { 中央大学
JR中央線八王子駅下車 } 由木折返
行に乗り「野猿峠」下車徒歩5分 場

参加費

10,000円 (他に懇親会費2,500円を当日会場で徴収)

申込手続き

日山協事務局に2月10日までに参加費10,000円を添えて申込みの事。

(社) 日本山岳協会

〒150 東京都渋谷区神南1-1-1

岸記念体育館内

東京集会のお知らせ

1月の東京集会は、新年会を兼ねて下記の通り開催致します。集会では、12月の集会で出来なかった中・ソ辺境旅遊隊のスライドによる報告会を行います。

日 時 1月25日(月) 午後7時～

場 所 HA J ルーム

インド・ヒマラヤ編(8)

保 険

(1) 現地雇用者の保険

ヒマラヤ登山に於ける遭難事故率の異常さについては、弊誌でも何度か紹介された通り、驚くべき数字であり、また、ヘリコプターなどによる救助にはかなりの費用がかかる事などを考え合わせると、ヒマラヤ登山に際しては保険に関しても事故対策の1つとして良く検討されるべきである。

インドの場合、登山隊は遠征期間中に雇用した高所ポーター及びローカル・ポーターに致命的な事故が起きた場合、下記の補償金を支払わなければならない。

- ローカル・ポーター 10,000 ルピー
- 高所ポーター 15,000 ルピー

また、これら現地雇用者の部分的な痲疾に対する補償金額は、インド登山財団（IMF）と隊長の協議によって決定された金額を支払わなければならない。IMFでは、これらの補償金の支払いに関して、登山隊がインドへ到着後、死亡・傷害事故に通用する保険に加入されることを奨励している。

登山隊が、エージェントを通して高所ポーターを雇用する場合、その費用に保険料も含まれているかどうか確認する必要がある。

インドの保険会社の保険料は、保険金の大体1%位を目安にしておけばよい。

尚、インドの場合、リエゾン・オフィサーに関しては、IMFが100,000ルピーの保険をかけてくれるので登山隊は関与しなくてよい。

(2) 登山隊員の保険

ヒマラヤ登山に於ける高い死亡率、高い救援費

用などを考えると登山隊は、隊員についても万一年に備えて保険をかけておいたほうが無難であろう。然し乍ら現実問題としては、ヒマラヤでの登山行為を取り巻く保険の環境は極めて厳しく、登山隊が契約できる保険の幅は著しく狭められている。

保険としては、生命に対する補償を基本とする生命保険と物的損害に対する実費負担を限度内で補償する事を基本とする損害保険がある。

先ず、生命保険であるが、登山隊の出発直前になって大口の保険に加入する事は難しい。殆どの保険会社がヒマラヤ登山へ出かけると聞くと大口の保険契約を結びたがらないのが現状である。ヒマラヤ登山に於ける高い死亡率が、これほど保険制度を後退させてしまっているのである。今のところ登山隊が出発前でも加入できるとしたら、郵政省の簡易保険や各種共済保険などごく限られたものになっている。

従来、多くの登山隊が、「安い掛金で大きな保障」として利用してきた郵政省の簡易保険（5年定期保険）は、1987年に保険約款が改訂され、傷害特約による傷害死亡保険金が加入1年未満では支払われなくなったようである。即ち、登山隊が出発直前に傷害特約を付加した保険契約を結んで出かけ、仮に傷害による死亡事故が起っても支払われるのは基本保険金だけで、従来のように倍額補償とはならなくなった。然し、傷害特約を付加しておくケガ（凍傷も含む）で5日間以上入院した場合、入院保険金が給付されるし、また、凍傷などで手足の指に障害が生じたような場合には、その程度に応じて傷害保険金が支払われるので、登山の場合は、傷害特約を付加する事をお勧めする。疾病傷害特約を付加すると保険料も高くなるが、傷害特約のみであれば保険料も僅かである。

次に損害保険についてであるが、一般海外用と

しては、「海外旅行傷害保険」がある。登山などの場合は、一般旅行よりも危険度が高いため、普通の海外旅行傷害保険に「運動危険担保割増」が組み合わされ、保険料はかなり高額となる。これらの組み合わせによる損保として「トレッキング保険」と云うのがある。これは傷害死亡・後遺障害、疾病死亡、救援費用を補償する保険で便利であるが、あくまでもトレッキングを対象とした損保であって、ピッケル、ザイル等を用いる登山行為での事故には補償されない。

尤も、登山に関してもそれほど高額な保険でなく100万、200万位の保険金なら、割高い保険料さえ覚悟すれば、保険会社によっては引き受けてくれるところもあるので、交渉してみるとよい。

ヘリコプターによる救助活動

最寄りの病院などの医療施設から遠く離れた地理的条件の悪いヒマラヤ山中において、救助を必要とするような緊急事態が発生した場合は、どうしてもヘリコプターなどの航空機による搬送手段に頼らざるを得ない。

ヒマラヤ諸国で救助活動に出動して貰えるヘリコプターは、殆どが軍隊所属のヘリコプターなので要請手続等に関しては、予め入山前に良く確認しておく事が必要である。また、これらのヘリコプターの性能は、飛行高度の限界がせいぜい5,500m～5,600m程度であり、これ以上の高度では救助活動が性能的に無理なので、ヘリコプターの出動要請にあたっては、現地の地形、気象条件等は勿論の事、高度の事もよく状況判断して要請する必要がある。日本国内のようなつもりで、高度の事を考慮せずに依頼すると、折角、ヘリコプターが飛来してきても役に立たず、お金だけを無駄にする事になりかねない。

尚、ヘリコプターの出動は、あくまでも人命救助が原則であり、遺体は運ばないので注意する事。

インド・ヒマラヤで救助に出動してくれるのは、インド陸軍及び空軍所属のヘリコプターである。

要請手続きとしては、以下の通り。

① 登山隊はニューデリーを出発して山に向う前に、必ず、在インド日本大使館に救助用ヘリコプターの出動に関する便宜供与依頼者と念書を提出

しておくこと。

② 登山隊の隊長とリエゾン・オフィサーは、入山前に自分達の目標山岳地域を所轄する地区のディストリクト・マジストレート（地方行政長官）／ディプティ・コミッショナー（代理コミッショナー）及びサブ・ディビジョナル・マジストレート（副地方行政長官）のいずれかに対して、入山届けと緊急時におけるヘリコプター出動を依頼しておく必要がある。

③ 出動要請が生じた登山隊は、連絡官を通じて近くのディストリクト・マジストレート（地方行政長官）・他（前述）へ伝令を飛ばして連絡する。連絡を受けたディストリクト・マジストレート（地方行政長官）・他は、最寄りのインド陸（空）軍管区司令部へ連絡をし、国防省から一番近くにあるレスキュー部隊へ出動要請を発令して貰う。

④ ヘリコプター・チャージは、飛行時間にもよるが、一回の出動に約25,000ルピー位かかる。

通常は、後日、IMFから請求書が送られてきて支払うようになる。日本のある隊は、ヘリコプターを利用しておきながら何年もその料金を支払わずにIMFで大きな問題になったことがある。利用したものは利用したで、きちんと代金を支払うようにしてもらわなければ、他の日本隊がいい迷惑である。こう云う事例が多くなればパキスタンのように入山前にレスキュー費用のデポジットを強要されることになりかねないので、当事者には呉々も注意して頂きたい。

リエゾン・オフィサーについて

インド・ヒマラヤに向う全ての外国登山隊にはインド人登山家のリエゾン・オフィサーが同行する。外国登山隊にリエゾン・オフィサーが同行するのは他のヒマラヤ諸国でも同じだが、インドの場合、同行するリエゾン・オフィサーはボランティアで参加しているのである。この点が他のヒマラヤ諸国のリエゾン・オフィサーと大きく違うところであり、登山隊はこの点を良く理解しなければならない。

インドのリエゾン・オフィサーは、自分達の休暇を使って外国の登山者と一緒にヒマラヤ登山を实践したいと願っている登山愛好家が殆どである。

IMFでは、これらインド人登山家で所定の登山研修を終了した者をリエゾン・オフィサーとして登録しておき、この登録者の中からその人の経験・休暇などを勘案して外国隊に割振っている。

従ってリエゾン・オフィサーが頂上に登りたいと云えば登山隊はその希望を汲んでやらなければならない。インド・ヒマラヤで登山隊とリエゾン・オフィサーの間に生じるトラブルの大半が、この“登らせる”、“登らせない”に起因しているようである。

大方の登山隊は、リエゾン・オフィサーを他のヒマラヤ諸国のリエゾン・オフィサーと同じく、連絡官としての位置づけしかせず、行動もベースキャンプ迄、と勝手に決込んでいるようである。

インドの場合、リエゾン・オフィサーも登らせなければならない、と云う事を計画段階から念頭に置き、個人及び共同装備計画、食糧計画を検討すべきである。

因に、遠征期間中のリエゾン・オフィサーのサラリーは、インドでの彼らの雇い主から支払われ、保険はIMFがかけてくれる。登山隊がリエゾン・オフィサーに用意するもの及び支払うべきものは以下の通り。

一支給装備一

登山靴（スパッツも）	1足
アイゼン	1足
ピッケル	1本
防風衣	1着
羽毛服	1着
寝装	1
エアーマット	1
ルック・サック	1
ストック	1本
クライミング・ハーネス	1
登行器（ユマール等）	1
水筒	1
ナイフ	1
帽子	1

その他、メンバーが必要とする装備は全てリエゾン・オフィサーにも支給しなければならない。これらの支給装備は、山へ出発する前にニューデ

リーで手渡し、点検を受ける。若し、この場合、必要な装備が用意されてなかったり、他のメンバーの物より劣るようなことがあれば、隊の出発が認められないことがある。

尚、上記支給装備のうちピッケル、アイゼン、登行器（ユマール等）、寝装袋の装備は、遠征終了後登山隊に返却される。

然し、ジャケット、ズボン、手袋、靴下等の個人衣類や靴などは、そのままリエゾン・オフィサーに与えてくれるようIMFでは要望している。

時々、リエゾン・オフィサーの支給装備を全部剥ぎ取ってきた、と自慢するような登山隊の報告を耳にすることがあるが、この手の隊の殆どは、リエゾン・オフィサーとの関係がうまくいかなかった隊のようである。前述したように登山隊はリエゾン・オフィサーへ遠征期間中のサラリーを支払わなくて済むのだし、彼もボランティアで来ているのだから、せめて個人衣類等の装備は気持ち良く差し上げてきてはどうだろうか。

尚、リエゾン・オフィサーの体型等については出発2～3ヶ月前にIMFから各登山隊に連絡がなされる。連絡が遅い時は、IMFに問い合わせるとよい。

カトマンズなどと違って、ニューデリーで登山用具を揃えるのは難しいので、日本から用意すべきである。

一食糧一

インド人のリエゾン・オフィサーは、殆どが宗教上の理由から牛肉を食べない。中には「ベジタリアン」と称して牛肉のみならず一切の動物性食物を口にしない人もいる。不運にもベジタリアンのリエゾン・オフィサーが自分達の隊に随行するようになった場合は、彼らのために特別なベジタリアン食糧を用意しなければならない。ベジタリアン食は日本人に判りにくいのでリエゾン・オフィサーに用意させ、その代金を隊が支払うようにすると面倒がない。

その他、リエゾン・オフィサーのデリーから山へ向う往復の宿泊費、食事代、交通費、コック及びポーター賃金なども隊が負担する。これらの費用は6週間で大体2,500ルピー位である。

チベットとその周辺の少数民族たち

山森 欣一

南チベット

チベットの中心地ラサやシガツェ、ティンリを南チベットと称することができる。

外国人に開放された以後のラサは、年々大きな変化を見せている。特に大ホテルが立ち、チョカン寺（大昭寺）の前がキレイな公園になってしまったことは、驚きと同時に失望でもある。

しかし、これらの一部を除けば、南チベットといえども、まだまだ昔どりの生活が続けられている。いかに立派な公路が造られようとも、そのすぐ横では、昔ながらのしきたりが守られている。

だが、ラサの大ホテルの従業員などは、シガツ

ェやラズーなどやはり南チベットの出身が多く、そのうちにこれらの影響は除々に、農村に浸透して行くに違いない。

シガツェから温泉で有名になったラズーに向かう。ギャンツェやラズーの付近は穀倉地帯で道路も良く整備されている。ラズー間近で公路から左へ500mほど入った所が、1984年カン・リンポチェと1987年ラプチェ・カンに同道した運転手「穷達吉」の実家である。解放軍入隊の通知書が飾られた部屋は、小ざっぱりとして清潔であった。彼の老母が間断なくアメとスーユ茶をすすめてくれる。彼の妹達が恥かしげに遠巻きにして私達を見ている。彼女達の子供もやがて民族服を脱ぎ捨て



▲ラズーの娘達



▲ランゴロの娘

▼大雪に見舞われたランゴロ村



てラサのホテルのサービス員となるのだろうか。

ラブチェ・カン登山で初めてティンリ高原に入った。ネパールへの大動脈であるこの公路は、多くの観光客が往き来している。チャンタン高原に比較すると羊や山羊の群れは圧倒的に少い。

峠を下りシガールやティンリに向かうと、峨々たる山々が路の両側に立ち並び、想像していた広大な平原とは全く違う様相であった。しかし、山を登る者にとっては、ティンリ間近から展開するチョモランマ、ギャチュンカン、チョー・オユー、ラブチェ・カンと続くヒマラヤの巨峰群は迫力あるものであった。

ティンリから20分ほど走ると、チベットとしてはめずらしく「参木込」と書かれた道標がある。これを左へ入り山裾を回わり込むと、公道からジープで30分ほどの所に朗果村がある。

戸数80戸人口約400人の村がある。村はラブチェ・カン方面から吹く風を避けるように山側の台地に造られていた。収穫の秋であった。強い南西の風を利用して麦の脱穀作用が夜遅くまで続けられていた。

女のほとんどが大きな貝を手首にはめている。村人たちは、朝早くヤクを追って耕地が極端に少



▲ランゴロの村長

南チベット概念図



いため村から遠く離れた田に向かう。ヤクと女達は刈りとられた麦を背負って夕方村へ帰ってくる。行き帰りには、我々のテントを覗くのをお忘れな。

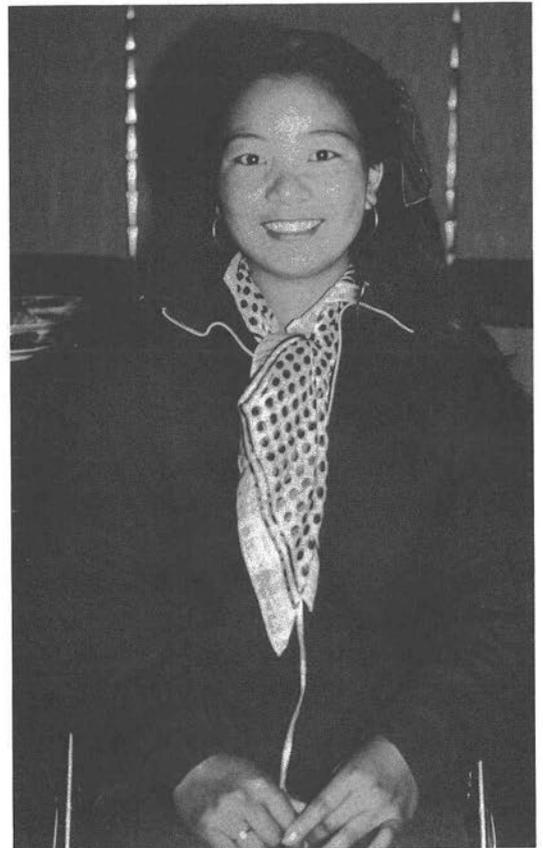
我々がチベット人の生活に興味を持つ以上に、彼等も自分達以外の人間を観察したいのは当り前の事であろう。

10月9日私はシガツェの病院を退院しランゴロ

村からABCに向かった。冬の近い高原は咲く花もなく茶一色の世界であった。それでもピーカンの陽差しが心地良かった。それから一週間後にこの世界がランゴロの古老さえ経験したことのない白一色に埋もれるとは誰が知る事ができたらう。麦の脱穀を夜遅くまで続けていたのは、この嵐を予感していたためだったのだろうか。



▲ラサ体育服務会社の女性



▲ラサ体育旅遊公司服務員

FESTIVAL OF INDIA

JAPAN 1988

1988年はインド祭が日本で開催される年です。インド祭は、1985年11月にラジブ・ガンジー首相が日本を公式訪問された時に日印両国首脳会議で開催が決ったフェスティバルです。

このインド祭は、1988年4月から9月にかけて、日本の主要都市で開催されます。これは、「古い文明が近代的環境に適応しつつ、いかにしてその根本を保存しているかを日本の皆様に示す。」と云うテーマで行われるもので、インドの豊かな文化と伝統の至上のパノラマが多種多様な形で披露される催しです。

このインド祭のプログラムを3回にわたって紹介します。



「生き物を傷つけてはいけない」
と教えるヤウデヤ部族の銅貨

この写真は2000年以上も前にインドで使われた貴重な銅の貨幣を示すものです。この貨幣は、紀元前200年頃に栄えたヤウデヤ部族の共和国が発行したものであり、殺生を禁ずる当時の教えを表わしています。鹿は釈迦の情け深い「アヒムサー」(殺生を禁ず)の思想を代表するものであり、その教えによりすべての生き物が聖なるものとみなされています。鹿の上には富を表わす壺「カラーシ」が、また、壺の上には繁栄と幸福を象徴する女神「シリ」がそれぞれ描かれています。貨幣の裏面には、シヴァ神とその妻パールヴァティーの第二子でヤウデヤ共和国の守護神であるカールティケヤが描かれています。この貨幣がインド

祭のシンボルマークとして使われます。

(資料提供：ランス・デーン)

音楽・芸能

1. 開会式
1988年4月15日
東京国立劇場
 2. 開会式関連公演
1988年4月19日
神戸ポートアイランド内会議場
1988年4月23日～26日
なら・シルクロード博会場
 3. 民俗音楽
1988年4月2日～28日
厚木、横浜、福岡、小倉、広島、岡山、神戸、大阪、京都、沼津、金沢、東京、浦和、仙台、札幌、習志野、四日市の各地
 4. 古典舞踊
1988年4月16日～25日
東京国立劇場、その後、名古屋、大阪、奈良、京都、福岡の各地
 5. 古典音楽
1988年5月中旬～下旬
東京、大阪、神戸、横浜の各地
 6. クリヤットム
1988年7月8日～22日
東京、名古屋、大阪、広島、福岡、武蔵野の各地
- インド祭の音楽・芸能関係プログラムでは、イ

ンドの古典芸能と民俗芸能が持つ豊かな伝統が紹介されます。100人を超すインド人芸能家が日本全国20都市以上を巡回し、これまで日本では見られなかったインドの素晴らしい芸能を披露します。

インド祭は、1988年4月15日に東京の国立劇場で行われる開会式によって正式に開幕されます。その際に披露される芸能プログラムは、ケララ州からの打楽器グループの演奏、ダカール兄弟によるドルパッド風旋律にもとづく古典「サーマヴェーダ」の歌唱、パンディット・ハリ・プラサド・チャウラシアによるフルート演奏、オディッシュ（東インドの古典舞踊）の上演、マニプール地方からのプーングおよびドール・チョラム（太鼓を用いる舞踊）の上演等によって構成されます。一行は東京の後、神戸、奈良でも公演します。

また、東京の国立劇場では、カタック、バーラタ・ナーティヤム、カタカリおよびマニプリ・ラーズの四大舞踊がビルジュ・マハラージ、マルヴィカ・サルツカイなどの舞踊家により披露されます。この公演は日本文化財団の協力によって行われます。

民音の協力で行われる民俗音楽の公演では、民衆の歌や音楽が披露されます。演奏曲目には、グルミート・バワによるパンジャブ地方の民謡、ジャハル・フセインとそのグループによる歌の競演、ラジャスタン地方からのランガとマンガニヤルによる感動的な歌唱、マニアン・マラルとそのグループによるケララ州の打楽器「パンチャヴァディヤム」と「ティアームバックカ」を用いての壮快な演奏などが加えられます。一行は東京、横浜、京都、大阪、福岡のほか12の都市で公演します。

古典音楽の演奏会も民音の協力で開催されます。有名な声楽家ビームセン・ジョシーの歌唱のほか、ヒンドゥスターニーとカルナータカの伝統的な古典打楽器の演奏が競演の形で行われます。

古代インド演劇として唯一現存するケララ州のクリヤットムが、アマヌール・チャクヤルとそのグループによって上演されます。インドのサンスクリット古典劇が持つ高度の古典性を保持するクリヤットムの様式と技術、またその古い伝統は、日本の演劇ファンにとり見逃せないものです。クリヤットムはオフィス・アジアの協力で上演され

ます。

アーディヴァシ（インド部族） 芸術展

1988年4月19日～5月22日
兵庫県立近代美術館（神戸）
1988年6月11日～8月7日
埼玉県立美術館（浦和）
1988年10月8日～11月6日
世田谷美術館（東京）

アーディヴァシ芸術展は、インド祭の一環として日本で初めて開かれるものであり、インドの部族民による作品を日本の皆様に紹介しようとするものです。

インドには500以上もの異なる部族が全国各地に存在しており、その人口は優に5,000万人を越えます。現代においても多くの部族の中に生きる部族の伝統は、それぞれが独自の多様性と豊かな表現力を持ち、美を力強く表現し、特に共通していることは、人を驚嘆させる感覚に富んでいることとあります。部族民の自然との密接な関係や自給自足の生活の在り方が、美への完全な価値感と感覚を生み出しました。部族民にとって芸術とは、細分化された社会にみられるような分断された活動ではなく、部族民の生活の中に織り込まれたものであり、一人一人が芸術の創造者として自分の作品に喜びを見い出しております。アーディヴァシの芸術は、体につける装飾品から日常生活用品に至るまで、生活のあらゆる分野にわたっています。

アーディヴァシの芸術の全貌を紹介することは非常に難しいため、この展覧会では主な部族の作品の中から特に見て楽しく、造形力も豊かなものが展示されます。展示品の一部はインドの博物館から借出したものでありますが、展示品の多くはインドの北東部、中部、南部、北部の部族地帯から集められたものです。

展示品の中には、宗教的または魔術的な意味を持ったり、あるいは世俗的、装飾的な用をたす絵画や壁の浮彫りがあり、テラコッタや粘土や青銅などの金属による作品も含まれます。石や木の作品としては仮面や儀式用具も展示されます。部族

が使用する材料は多岐にわたり、必ずしも長持ちするものばかりではありません。部族民は、時間の流れを直線的というよりもサイクルとして捉え、命のはかなさを熟知し、新鮮な創作力を発揮します。乾草や籐や竹を用いた作品も出品されます。この展覧会はその対象を部族自身が作ったものみに限定するものではありません。部族民の居住区を取巻く農村社会は伝統的にアーディヴァシが使用する物や偶像の根源となっているため、これらの農村社会で作られた物も展示されます。

しかし、それぞれの作品が作られた場所を無視して単に展示品を見せるだけでは、幅と奥行を欠くことになります。部族芸術は部族民の生活の本質的な一面を示すものであります。このため本展覧会では大型の写真パネルが重要な役割をなし、部族をとりまく自然環境、家庭、生活様式のさまざまな面を紹介します。こうすることによって、部族民の生活の喜びを表現するものとして、展示物がもつ意味がより良く理解されます。

なら・シルクロード博

1988年4月23日～10月10日

奈良国立博物館（奈良）

奈良はかつては大和と呼ばれ、1,000年以上の歴史をもつこの古い都市は奈良時代の都(平城京)として栄えましたが、同時にかの有名なシルクロードの東の終着点でもありました。シルクロードは単に物資を運ぶ道であっただけではなく、日本に思想、哲学、宗教、科学、芸術をも運び、日本文化の形成に大きな影響を与えました。奈良は日本文化の発祥地といわれ、シルクロードを通ずる外国との交流、対話の中心地でありました。

なら・シルクロード博は、「民族の英知とロマン」をメインテーマとして、奈良県と奈良市が共催する国際的な文化行事です。六ヶ月に及ぶこの博覧会は、シルクロードに位置する国々のさまざまな文化を紹介し、同時にシルクロードと日本の文化ならびに日本人の心との関係を説き、更に世界的視野に立って、シルクロード関係諸国の文化を探ろうとするものです。

インドはシルクロード諸国の一つですが、それよりも重要なことは、インドが現在日本で見



▲カタカリ・ダンス (Photo : アビナシュ・バスリチャ)

られる宗教や哲学に大きな影響を及ぼしたことです。日本では、インドから伝来したものとして仏教が最も良く知られていますが、それだけではありません。従ってインド祭がこの博覧会に参加し、インドが日本に与えた影響を広く披露しようとするのも当然といえましょう。

インド祭となら・シルクロード博はほとんど同時に行われますが、同博覧会での古展芸術展はインド祭の後援で開催されます。古典芸術展での展示品には、デリーの国立博物館、カルカッタのインド博物館、マトゥラの政府博物館、インド考古学局などから選ばれた国宝級の彫刻20点以上が含まれ、仏陀の座像、立像、頭像が特に注目されます。また、優れた彫刻として知られるヤクシャとヤクシの像や、スリ・ラクシミの赤砂岩像を含むクシャン王朝時代の芸術品も展示されます。

(次号につづく)

■ 寸 感 ■

東京の12月の積雪は大正何年ぶりとか云う日に南アルプスの麓に出かけてきた。冬の偵察を兼ねて土・日で行けるところ迄行ってみようと気楽に車で出かけた。アプローチの長さで定評のあるあの赤石・荒川の麓まで我が家から4時間程で着いてしまうのだから便利な世の中になったものである。今や、治水・治山工事に伴って道路はどんどん山奥へと延び、ゴルジュ帯には巨大なコンクリートのお化けのような堰堤がどんどん出現している。

工用重機の騒音から逃がれるように薄っすらと雪のついた小渋川沿の道を辿って、先を急いで行った。広河原迄約1時間程の所迄来た時、道から外れた川岸の変な場所に1張の黄色テントを見つけた。高捲き道から転落して腰の骨を折り、動けないでいた遭難者を発見したのである。この遭難者は、入山8日目の最終下山日に事故に会い、それから我々に発見される迄、何んと1週間、救援を待っていたと云う。気力、体力とも意外としっかりしており、良くあの寒波の中を頑張ったと思った。冬山の単独行は呉々も慎重に！

事 務 局 日 誌 (12月)

1日(火) BTC総支配人 J. チュルティム氏と懇談(尾形)

- 9日(水) 事務局打合わせ(稲田、山森)
- 10日(木) 来日中のパキスタン山岳会のシェア・カーン氏と懇談(尾形)
- 12日(土) ヒマラヤNo.194発送
- 15日(火) 海外登山女性懇談会(日山協主催、都岳連主管)(尾形)
- 18日(金) 第8回ヒマラヤン・ラリー優勝記念パーティ(尾形)
- 19日(土) 新青峰打合わせ
- 21日(月) 東京集会・忘年会(20名)
- 24日(木) ゲニ集会
- 25日(金) 御用納め

ヒマラヤNo.195 (2月号)

昭和63年1月10日印刷 63年2月1日発行

発行人 遠藤 登

編集人 尾形 好雄

発行所 日本ヒマラヤ協会

〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1
淀橋食糧ビル506号

事務局から

会費納入のお願い

本会の年会費(6,000円)は、前納制となっております。昭和62年度分の年会費をまだの方は、速かに納入下さいますようお願い致します。

本年度も早、1月となりましたので63年度分も合わせて(12,000円)ご納入頂ければ幸甚に存じます。

尚、まだ納入されていない方には、「ヒマラヤ」に「前金切れ」の表示をして督促しておりますので宜しくお願いします。

郵便振替 東京0-48954 日本ヒマラヤ協会
年会費 6,000円

神の山、ゲニ峰

1987年夏の記録、刊行

1987年7月~8月にかけて13名から成るH A J 隊は、中国四川省の知られざる海子山塊のゲニ峰(6,204m)初登頂を目指したが、生憎と悪天候に阻まれ、登頂は断念となった。88年の再挑戦を前に此の度、同隊の報告書が上梓された。気象衛星「ひまわり」からの気象報告が有り、知られざる山塊の参考になる。

B5版 74ページ、口絵モノクロ写真3ページ、
本文モノクロ写真多数。

(頒 価) 1,000円(送料200円)

(申込み先) 日本ヒマラヤ協会事務局まで

TREASURE TOUR



EXPEDITION & TREKKING

自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

—— 遠征隊、トレッキング、秘境への旅 ——

あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、
お客様のご要望に遠征経験豊富なスタッフがお答えします。



マウンテンラベル株式会社

〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F

☎03-574-8880

三井航空サービス代理店2452号

カラコルムの秀峰 ウルタル山



遥かなる高み

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします。
～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・東南アジア・アフリカ・南米～

トレッキング・海外登山
シルクロード・秘境旅行
のパイオニア



株式
会社

西遊旅行

東京本社 〒101 東京都千代田区神田神保町2-2 新世界ビル5階 ☎03(237)1391(代表)

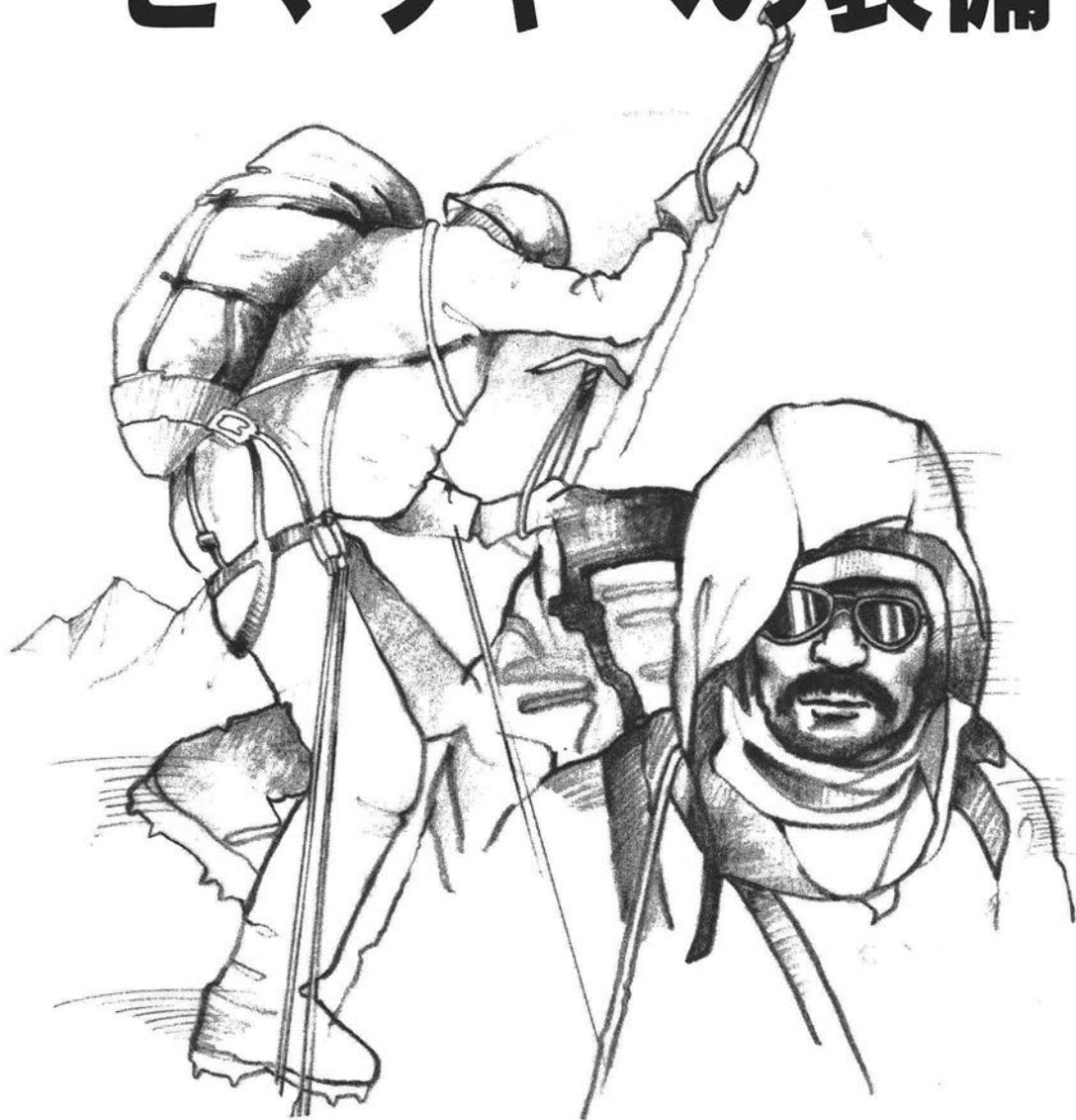
大阪営業所 〒541 大阪市東区平野町4-53-3 ニューライフ平野町202号室 ☎06(202)1391(代表)

カトマンズ営業所 JAI HIMAL TREKKING (P) Ltd. P. O. BOX 3017

KATHMANDU, NEPAL ☎221707

運輸大臣登録一般旅行業607号

ヒマラヤへの装備



◎遠征隊の装備、相談にのります。



ICI 石井スポーツ

- 登山本店 / 〒160東京都新宿区百人町2丁目2番3号 ☎03 (208) 6601 ~ 3
- 大宮店 / 〒330埼玉県大宮市宮町2丁目123番地 ☎0486 (41) 5707
- 水道橋登山店 / 〒101東京都千代田区三崎町2丁目8番14号 ☎03 (264) 5575 ~ 6
- 神田登山店 / 〒101東京都千代田区神田神保町1丁目8番地 ☎03 (295) 0622
- 新宿西口店 / 〒160東京都新宿区新宿1丁目16番7号 ☎03 (346) 0301 (代)
- 高崎店 / 〒370群馬県高崎市新町6番地 ☎0273 (27) 2397 (代)
- 札幌登山店 / 〒060北海道札幌市中央区南二条西4丁目4番 ☎011 (222) 5305

- 新潟店 / 〒950新潟県新潟市東大通2丁目5番1号 ☎0252 (43) 6330
- 仙台店 / 〒980宮城県仙台市東八番丁107番地の36号 ☎0222 (97) 2442
- 町田ジョルナ店 / 〒194東京都町田市原町田6丁目6番地14号 ☎0427 (26) 6248 (代)
- フーズショップ / 〒160東京都新宿区百人町2丁目2番43号 ☎03 (232) 1286
- 外商部 / 〒160東京都新宿区大久保2丁目19番10号 ☎03 (200) 7219
- 事務所 / 〒160東京都新宿区百人町1丁目4番15号 ☎03 (200) 1004